

悠久の京を訪ねて Part IV

Vol.14



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

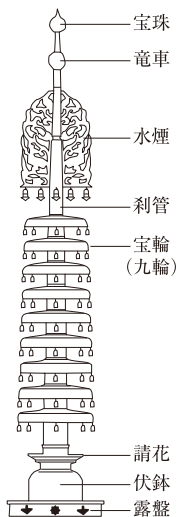
小さな塔に託された願い ―ひさご形土製品―

■美濃山廃寺で出土した珍しい土製品

京都府八幡市と大阪府枚方市の境に近い丘陵上に、7世紀末から8世紀初めごろに造営された寺院跡(地名から美濃山廃寺と命名されました)があります。美濃山廃寺では、

貴重で珍しい遺物が見つかります。その遺物は右下の写真にある高さ約20cmの土製品で、全国的に見ても美濃山廃寺でしか見つけていません。

帝塚山大学の故森郁夫先生のご教示によって「ひさご形土製品」と名付けられました。その理由は、奈良時代の記録に、塔の先端にある相輪のうち宝珠と竜車の2つを合わせて「ひさごがた」と呼んだ記述があり、これを模倣したと考えられたからです。土製品の下部に他の器物に固定するための突起と穴があることから、小形の塔の先端や台座に固定したと考えられます。



相輪の部分名称
(『日本史大事典』をトレス)

美濃山廃寺



■小塔供養のはじまり

美濃山廃寺では、ひさご形土製品が約30点出土しています。このような小さな塔をたくさん造って、国家の安寧や長寿、罪業の消滅などさまざまな願いを行うことを「小塔供養」といいます。ひさご形土製品もこのような小塔供養に用いられたのでしょうか。

これまで小塔供養は、奈良時代後半に称徳天皇の発願により製作された「百万塔」から始まったと考えられていました。百万塔は小さな木製の塔に経文を納めたもので、実物が法隆寺に現存します。しかし、美濃山廃寺でひさご形土製品が発見されたことにより、小塔供養は奈良時代前半まで遡る可能性が高くなりました。美濃山廃寺の事例は初源のものとして注目されます。



ひさご形土製品